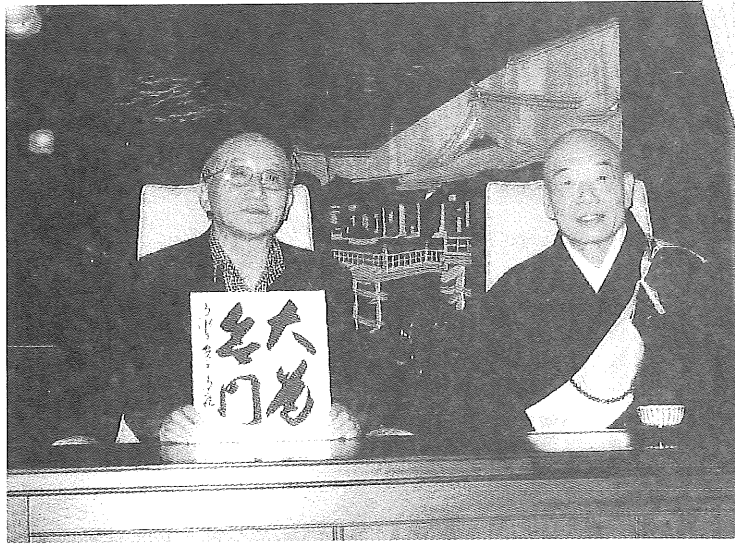




今年は私共の母校福岡
県立福岡中等学校ならび
十周年記念の年に当たり

会長 小山 富夫

今年は福中・福高創立 九十周年記念の年

まず。本部では、記念行事が六月九日(土)に福岡講堂と体育館で、また記念同窓会総会及び懇親会が六月十日(日)に福岡国際会議場で執り行われます。記念事業として

一、福中・福高九十周年誌の編纂

二、生徒用食堂の全面改装

三、校史資料室・展示室の拡充

四、弓道場の建設等が計画されています。

また「創立九十周年記念音楽会」が六月九日(土)福岡サンパレスホールで開催され、本校OBの著名な声楽家三名(山本健二さん(高校三回)、山口俊彦さん(高校十八回)、山田健司さん(高校

二十回)今年、関西の当番幹事)をお招きし、様々な歌曲をご披露いただく予定になっています。

特に、山本健二さんの発案で「くちなしの花」によるCD製作が企画されています。これは昭和十三年三月旧制福岡中学校卒業後、慶応義塾大学法学部に入學された宅島徳光さんを偲ぶものです。宅島さんは昭和十八年九月学徒出陣により海軍航空隊に入隊、昭和二十年四月金華山沖で任務中遭難し二十四歳で亡くなりました。遺稿集「くちなしの花」は、宅島さんが太平洋戦争末期の厳しい飛行訓練の合間に書き残した手記をもとに、供養のため遺族の方々が私家本として出版されたものです。これを全校生徒の皆さんへ回覧、作品を募集し、優秀作品に作曲し「創立九十周年記念音楽会」で曲を披露するものです。また併せてCD「くちなしの花」を記念

品として製作・配付されますので機会を見つけて拝聴ください。

同窓会の「記念行事」はとかく「ハコモノ」的になりがちですが、小林本部会長の方針として「文化的・精神的」を中心に考えたいと仰っておられました。是非、「千の風になって」のように一世を風靡したものです。

さて、昨年の関西福中・福高同窓会のホームページで掲載しましたように昨年は私共の「旧制中学入学の還暦祝い」の年でした。全国から高校四回生の同窓生が集い六月の本部総会・懇親会の席上、台上がりをさせて頂き千名近い皆様の面上で祝賀を受け、福高名物のラグビー人形をお祝いに戴き大変な光栄でした。

さて、旧制中学に入學当初から、恩師や先輩たちより、「本校は伝統ある学校である。校風を乱す事がないように」と事有る毎に言われ続け、また本人たちも自覚をしていました。今にして思えば不思議な事ですが、今年が創立九十年、昨年は私共の入学六十年、差し引きに二十九年目の入学だったわけですが、私共にとっては江戸時代や明

治時代からのような重い伝統のように感じ入っていました。

三十年の年月も永いと思えば良い伝統や校風も築けるし、歴史も浅いと思えば、浅いなりに、あつと過ぎてしまう月日の大切さを痛感しています。

ここに掲載させていただきました写真は清水寺の森貫主とご一緒に写させて頂いたものです。昨秋、森貫主を訪れる機会がありました。森貫主はテレビで有名な「当年の世相を漢字一文字に表現」される方です。(漢字は財団法人日本漢字能力検定協会が選定) 昨年は「命」と言う文字を揮毫なさいました。この漢字一文字の中に昨年の出来事が圧縮されているように思えます。久しく待ち望まれてこの世に命を受ける人もあれば、飲酒運転やいじめの犠牲で幼い命を

「現代を生きる 清水の心」のご講話の中で、「もったいない」を論じておられます。「LOVE」を愛と無理やりに訳しているように、「もったいない」を英語に訳す事も難しいと思います。「もったいない」という単語はやがて死語になるのではと言われていますが、今日世界中で発生している環境問題や地球温暖化問題を考えますとき重要な「キーワード」ではないかと思えます。

西 関 朝ぼらけ



発行責任者
関西福中福高同窓会
柴田 忠良 (高12)
北葛城郡上牧町
滝川台1-3-2
Tel&Fax: 0745-76-7385

関西福中福高
同窓会事務局
西宮市下葦原町
1番32-404号
事務局長 友松 宣昭
Tel: 0798-22-8058

平成19年度 《同窓会役員》

顧問	大隈 壮介 (中13)
	三笠 正人 (中20)
	合屋 嘉夫 (高4)
会長	小山 行幸 (高5)
副会長	杉原 詢二 (高6)
幹事	辰巳 知泰 (高13)
監事	桑野 忠良 (高12)
常任幹事	柴田 宣昭 (高13)
事務局長	友松 啓子 (高22)
常任幹事	井上 幹郎 (高6)
	松岡 旦生 (高8)
	大津 礼文 (高9)
	住吉 糸樹 (高12)
	江田 正幸 (高17)
	片岡 玲子 (高23)
	岡部 和也 (高28)

絶った無念な人やご家族
もあります。

いろいろとお話を承
り、帰りに「大道無門」

と言う文字を色紙に戴き
ました。この文字は読ん

で字の如くですが大変気
に入り「座右の銘」にさ

せて頂くかと思ってい
ます。

「現代を生きる 清水

の心」のご講話の中で、

「もったいない」を論

じておられます。「LO

VE」を愛と無理やりに

訳しているように、「もっ

たいない」を英語に訳す

事も難しいと思います。

「もったいない」という

単語はやがて死語になる

のではと言われています

が、今日世界中で発生し

ている環境問題や地球温

暖化問題を考えますとき重

要な「キーワード」では

ないかと思えます。

行こう！ 飛ぼう！ 関空！



香椎 裕人（高19回）

一月二十六日関西福中・福高新年会で、「関西国際空港」についてお話しする機会を与えていただきました。「シヨートスピーチ」がシヨートにならずご迷惑をおかけしたと思います。厚かましく会報に寄稿させて頂くことになりました。

「関空」は今年八月二日に二本目の滑走路がオープンします。私は「関空」に勤務して四年しか経っていませんが、拙文が皆さんに「関空」をより知って頂く助けになればと思います。日頃感じていることを交えて解説させて頂きます。

I. 関西国際空港は、どんな空港？

関空は伊丹空港の環境問題を抜本的に解決する目的で、泉州沖五キロの沖合に建設された海上国際空港です。一本目は五

百十ヘクタールの人工島に三千五百メートルの滑走路を建設、平成六年九月に開港しています。二本目の四千メートル滑走路が新しい人工島（五百四十ヘクタール）に建設され、この八月にオープンすることになります。

今日までの投資額はおよそ二兆四千億円、莫大な資金を投入したプロ

とみると、十八%の方が成田を、十三%の方が関空を使って海外へ行っておられます。沖縄や北海道の海外旅行者のうち関空を利用された方が二割を超えている時期もありました。関空は「関西」の空港ではなく、関西にある「日本の国際」空港である、私は機会ある毎に力説しています。

ここで、諸外国の空港の整備状況を見てみます。ニューヨーク、ロンドン、パリは三千メートル級の滑走路を四〜五本持っています。アジア諸国では、

関空は21世紀の「難波の津」

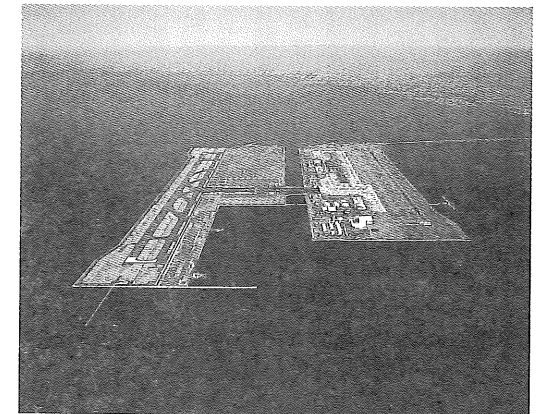
ジェットです。米国土木協会から二十世紀を代表する「世紀の偉業」を受賞しています。私はこの資産は国民の大切な社会インフラであり、これを活かしたり、次の世代に意義ある社会的共通資本として引き継いでいくことが使命だと思っています。

一七年度の日本の国際航空旅客数は五千三百万人、六割の人が成田空港を、二割が関空、一割が中部空港を、残り一割がその他の空港を利用しています。九州の人に限っ

II. 関空の経営について 「空港建設」から 「空港経営」へ

平成十五年六月に、関西国際空港株式会社は松下電器産業から村山敦さんを社長に迎えました。会社設立後初めての民間出身社長が誕生し、経営が大きく変化したと思います。それは「オペレーション・ベストを目指す」経営で、私が感じていることを三つご紹介します。

まず第一には「お客様第一主義」の徹底です。社長就任後、社内外にお



聞かえますが、お客様第一の観点から、自然災害に耐え強く、安全な空港づくりへの取り組みにも積極的に取り組んでいます。昨年豪雨対策、地下水対策、高波対策など自然災害に対する基本的な対策を実施、完了しました。これにより海上空港としての宿命とも言うべき自然災害、さらには沈下に対しても強い空港に生まれ変わりました。今年には空港への連絡橋の暴風対策を実施することになっています。

八月に二本目の滑走路がオープンする関空が、日本で唯一これを充たす空港となります。今後の我が国の空港整備を考えますと、関空を最大限有意義に使い切ることが大切だと考えます。

二番目には、トップダウンとボトムアップがうまく絡み合い、風通しの良い組織になったということです。毎月、社長が全社員に対し、会社の現状、課題を説明する朝会を続けています。一方、

社員提案を積極的に取り上げ、色々なチャレンジを実行してききました。楽しめる店舗の改装、体験型の展望ホールのリニューアル、ブティック免税店のオープンなど、ここ数年でかなり変わってきたことを実感していただけたと思います。対岸のアウトレットモールやショッピングモールとの百円バスの運行なども社員提案を実行したものです。マスク取材にも提案を実現した若い社員が対応し、社員のやる気を高めていると感じます。

三番目には、全員一丸となった利益確保への取り組みです。若い社員がリーダーとなるビジネス・ユニット毎の損益管理の仕組みを導入しました。私には、赤字を続けていたことが「関空たたき」のベースにあったと思えてなりません。意識の改革が必要でした。平成十六年度以降三期続けて経常黒字となります。大きな借金を抱えていますので安定しているとは言えません。一つ一つのハードルを越えたと思っています。

III. 最後に
関空は二十一世紀の「難波の津」にならなければと思っています。今課題となっている環境にマッチした空港であります。あわせて、二十一世紀はアジアの世紀と言われています。関空という社会インフラを活用することが求められている今、皆様のご理解が必要です。最後に、我々の先輩であります大阪市立大学名誉教授三笠正人氏の論文から、一部を抜粋させていただきます（ご了解を下さいます）。「都心に近くて便利だと人気の高い伊丹空港の騒音対策費に十年前までにすでに六千億円（関西空港一期の埋立費とほぼ同じ）が投入され、今もなお同じペースで国費が注ぎ込まれていると聞けば、またその上安全面のことも考えれば、過密の関西地方では岸から五キロメートルの海上空港が正解なのだと気がつきます。皆さんもどうぞ多少の不便は我慢して関西空港をひいきにやって下さい。」

私の思い出

福高化学部と隠れキリシタン

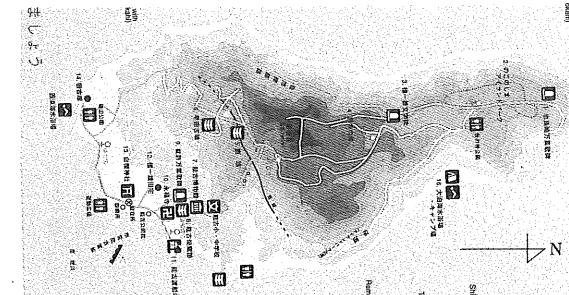


久保 晃弘 (高8回)

◆能古島キャンプ

能古島はいま島全体がレジャーランドになっていくようだが、「当時」はひっそりと静かな島だった。人影も見えない島の北側海岸で、毎年楽しむ化学部恒例の夏キャンプの思い出のひとつから、私はミカン泥棒を敢行するに至った。

雨の中、先頭と最後尾に懐中電灯の光の輪が動くだけ。真っ暗闇の山道を、十五人ほどの列が黙々と登っていく。毛布にくるまって寝入ったばかりの午後九時頃、予期せぬ降雨に見舞われた。テントという高価でしゃれた装備はなく、蚊帳を吊るして「野宿」するのがこのころの私たちのキャンプであった。



たち一年生部員は肌寒さに震えながら、先輩たちが交渉から帰ってくるのを立ちつくして待っていた。「雨宿りをお願いしたら、止まんしやいと、言ってくれた」という。私たちは歓声をあげた。迎えてくれたのは七十歳前後の小柄な夫婦。薄暗い明かりに浮かぶ丸顔は健康そうで明るい笑顔だった。疲れた。さっそく衣服を着替えて眠りにはいれる。真夜中十二時頃だろうか。おーい、お祈りをするそうだ。目が覚

めたヤツは起きてこい」と上級生。寝ぼけ眼のままついていく。祈りは始まっていた。六畳ほどの部屋にはろうそくの炎がゆらりと揺れるだけ。暗い。仏壇は異常に高いところにある。あとであれは祭壇だったのだろうと知る。「アーメン、アーメン、アーメン、アーメン……」と早口で何度も何度も唱えている。まるで「なまんだぶ、なまんだぶ、なまんだぶ……南無阿弥陀仏」とお経をあげているようにも聞こえる。ローソクの灯で下から照らされた老夫婦の顔は蠟人形のようにこわばっている。不気味な怖いような雰囲気。恐ろしいものをみたかのように、いたたまれず部屋を抜け出し、毛布を頭からかぶった。

◆点と線が結ばれた

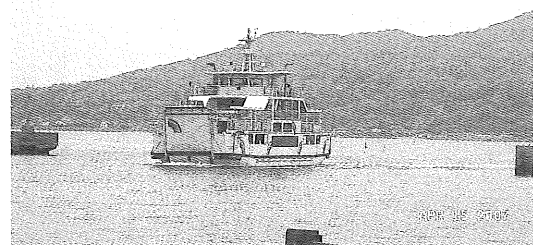
私の記憶もここまで。一化学部雑兵に過ぎない怠け者の私のことである。何の感慨も疑問も歴史的な関心も跡形もなく吹っ飛んでしまった。化学部生活の思い出は、楽しいばかり。遊び呆け、失敗やら恥多きがらくたの断片で満たされている(これらの思い出も、いつかはしゃべりたいと思うが)。

ただ、あのとのお祈り「なぜか少し怖かった」心象風景だけが、時折心の片隅に浮かぶことがある。

かつて大阪府の北部、高槻市に住んだことがあった。高槻はキリシタン大名高山右近の居城があった。高潔な人格と篤厚な為政を知る市民から愛されてきた。右近に少し興味を寄せたであろうその頃ではなかったか。松田元信という名の同窓生から「関西福中福高同窓会組織をたちあげる。設立のための第一回同窓会総会を大阪湾に浮かぶ客船サンフラーで開く」と、ゲキがとんできた。

暢気な鈍感な私であるが、ここにきて初めて「同窓会」福高化学部キャンプ「能古島」キリシタン「高山右近」が点から線へと連結した。

「ああ、あの隠れキリシタンというおじいさんおばあさん、とくに亡くなっているだろうな。あのときの少し怖かった心象の扉が少しずつ開けてくる気がした。隠れキリシタンが、外部への警戒心と恐怖心を形式化した「儀式」として伝えてきたものであったとしても、老夫婦の遺孀子にインプットされたであろう強固な



▲能古島渡船

信仰のありように、あのとき漠然と畏れを感じたからに違いなかった。

◆博多とキリシタン禁教

博多とキリシタン禁教とは、歴史的因縁が深いことはご存知の通りである。フランススコ・ザビエルの来日以来、信長の加護もあってキリスト教は各地に広まり、秀吉も好意を持って助力し、宣教と貿易の一体を認めていた。その秀吉が突然「宣教師追放令」を下した発信舞台は博多だったのである。

◆キリシタンの末裔

秀吉はそれだけでなく、スペインに対して日本征服の意図をうち砕く恫喝までしているのである。宗教を前面に押し立てて征服していく手法は往時の歴史的事実であった。政治へ介入する宗教の危険性に注目し、いち早く先手を打った嚆矢の舞台は博多だったのである。秀吉は高山右近の追放令も出す。右近はあらゆる

い、軍船の威力を誇示した。激怒した秀吉は時を置かず、パテレン神父追放を決断したのである。司馬遼太郎の著書(書名は忘れたが)では、このところは見方は異なる。戦役のため軍装して博多にいる秀吉に喜んでもらおうと、自らも軍服に身を包み、銃、砲を満艦にして出向いて見せたのであり、コヨリテの愚態はすれであった、とする。司馬らしい、人間の情感の面から歴史を切り取って推察しているのである。いずれにしても秀吉はこれを許さなかった。

説得を拒否し、ついに能古島に逃れ、島原など転々、流浪の人生を選択する。その後、家康がキリシタンを徹底的に弾圧し迫害していったのもご存知のとおりである。長崎から以西の九州は大多数のキリシタンがいた地である。博多ももちろんであった。禁教による弾圧が熾烈を極めて、熱心な信者は辺境の地にのがれ、あるいは隠れキリシタンとなった。能古島に隠れキリシタンの末裔が住んでいたことも、ごく自然なことであった。

信者の大半は農民漁民であった。封建社会のいちばん下積みで生きる彼らにとって「人間は平等」の考えは心に浸みる教えであったに違いない。オラシヨ(ラテン語によるカトリックの翻訳)を唱えることを生きる糧とした彼らの内なる叫びが聞こえる。表面は仏教徒を装いながら、ほんの身近な信者同士だけで信仰を守っていく。そんな中で、教義の内容も作法も祭壇も変貌していくのは自然だった。時間の経過は容赦しない。あのとき「なんまいだ」の繰り返しの



▲能古島遠景（渡船場より）

ように聞こえたのは気のせいだけではなかったかもしれない。

◆檀一雄の碑のあたり

十年程前のことである。懐かしの化学部キャンプ地、能古島を友人と訪ねた。船着き場から斜面を上がって北へ向かう。かなり歩いた。生い茂る木々の一角に檀一雄の碑がひっそりとあった。ここ能古島を愛した檀一雄の晩年のメモリアルとして、あまりにも周囲がわびしく寂寥としていた。このあたりの急斜面を北側に降下したあたりが、化学部のキャンプ地の海辺であろうかと見当をつけた。あの隠れキリシタンの末裔である丸顔の老夫婦の家はこの碑の周辺だったはずと勝手に納得して、島再訪の目的を果

たした。

もと来たコースをたどりながら。途中で道をそれると、開けたミカン畑があった。農小屋らしい建物はあるが、人影はないように思えた。八朔がたわなに実り、目の高さにも二つ三つぶらさがっている。周囲を見渡してから八朔に頭をぶっつけた。偶然、頭に当たって落ちたのだと、言い張ろうとの魂胆だった。数回試みたが、落ちないのでそと一つをもちとった。目撃の住民がいたかもしれないが、おでこを赤く腫らしたおじさんの姿が、あまりにばかばかしくて見なかったことにしてしまったのかも知れない。私はこの島が持つ歴史の重みをちっとも考えない半世紀前の「わるそう」に戻っていた。八朔？そりゃあ、おいしかった。勉強嫌いな私にとって、能古島の隠れキリシタンについてもう少し詳しく調べてみようとの意欲も学識も持ち合わせていない。いつまで経っても淡くしかも消えることのない郷愁の域を出ない。隠れキリシタンと化学部キャンプとの遭遇を、この盗んだ八朔が新鮮な甘味でくるんでくれたことに謝意がふくらんだ。

▲追記▼

化学部の思い出記にはずれてしまった。能古島の描写も現状の姿らしくないかもしれない。思えば私の履歴は「はずれ」「らしくない」ばかりの積み重ね。的はずれ、優等生コースはずれ、志望コースはずれ、出世コースはずれ、出せコースはずれ、あてはずれ……。生徒らしくない、学生らしくない、新聞記者らしくない、恋人らしくない、夫らしくない、父親らしくない、闘病人らしくない、百姓らしくない、老人らしくない……。それでも、私の自慢したいアイテムがこのなかに一つはある。

平成19年

三年三会



▲挨拶する小山会長

恒例の新年会、一月二十六日、四十名の会員の参加があり、ホテルクライトン新大阪において開催されました。今年の会は、総会の当番幹事である二十回卒の皆さん（六名）が中心になり、受付、会場設営、司会進行とすべてにおいて、総会の予行演習をかねて運営してもらいました。校歌斉唱に始まり、小山会長の挨拶、合屋顧問の乾杯、昨年の当番幹事であった香椎氏（十九回）のミニトーク「関西国際空港は、どんな空港？」、次なる出し物マジックショウでは参加者と一体となった演技で会場を沸かせてもらったマジシャン松岡氏（六回）、殊のほか会場を沸かしたのは鬼塚氏（二十回）の軽妙な司会と声楽家山田氏（二十回）による黒田節。会も最高潮に達したところで参加者全員肩を組んでの応援歌で幕は閉じられました。例年にない盛り上がりを出された当番幹事の皆さんのチームワークはすばらしかった。

中国の今

飛び出した熟年



三木 昭男（高12回）

＜自己紹介＞

中国河北省秦皇島「燕山大学」日本語学科教師。（正確には9月からの予定）出身は福岡県、福岡高校、九州大学経済学部卒。伊藤忠商事に昭和三十九年入社国内鉄鋼部門に所属し、五年ほど前に定年退職いたしました。現在大阪/弁天町在住。

昨年より一年間中国語の勉強に「秦皇島」の「燕山大学」に語学留学しました。何も予備知識も無い一年間の留学では語学（漢語）は全くものになりませんでした。この七月に一旦帰国したので、燕山大学「日本語学科」の先生をしてもらった御茶ノ水大学教授OBの大橋先生が私を「教師」として大学側に推薦してくださいました。私は「先生などしたことないし、全く自信ありません」と申し上げたのが私の使命の一つになるかも知れません。今学期の外国人教師

師。両端男性二人の中国人先生（受け入れ窓口）を除いて、燕山大学に居る外国人教師。アメリカからが一番多くてその次日本から三人。上段左から三番目が私。右隣からイタリア、カナダ、英国、米、フランスそして右端の女性がロシア/タチアーナ。前列右お二人が安富、高橋両先生。三番目がドイツからのカチア、その次がアメリカ人最年長のミッチ先生、それから米、米、カナダ、米、と奥さん一人。（三木昭男氏の了解を得てホームページから）



<http://www.eonet.ne.jp/~akiomiki/index.html>

久保田先生



荻田 玲子（高23回）

赤軍派による日航よど号乗っ取り事件がおきるなど騒然としていた。いいようなない閉塞感が出始めていたところである。

何年か前に雑誌の文藝春秋が『三島由紀夫が自決した日にあなたは何をしていましたか』を特集していた。

一九七〇年十一月二十五日のことである。作家の三島由紀夫は自ら結成した楯の会の会員四人とともに東京市ヶ谷の陸上自衛隊駐屯地東京方面総監部に押し入り、総監室にたてこもった。そしてバルコニーから自らの主張を演説した。このときの軍服に白はちまきをした彼の姿を覚えていた方も多いはずである。しかし演説は上空を飛ぶヘリコプターの音にかき消され、隊員からは「三島頭を冷やせ」などのヤジがあびせられた。その後彼は総監室に戻り自決を遂げた。

ベトナム戦争が激しく、反戦運動も熾発な時代だった。一方、国内でも武装

が教室全体に漂い眠気が襲ってきた。

国語の久保田先生は教室に入ってくるなり

「三島由紀夫が割腹自殺をしました。介錯もしたそうです」と簡潔に語りかけた。短い言葉の中にまだ若い先生の押さえきれない興奮が垣間見えた。教室の空気がかわった。

私は介錯の意味がわからなかったの、隣の男子に尋ねた。すると「切腹した後に首を落とすこと」とすぐに答えが返ってきた。いったいなぜそんなことを、という気持ち、その男子にさすが男子の子と思ったのを覚えて

いる。

久保田先生は当時、いつも細身の体にダンディなスーツをきりりと着こなされ、さわやかな文学青年の雰囲気をおもちの方だった。

それから三十六年たった去年のこと、第二十三回関西福中福高同窓会総会が催された。

例年、恩師が数名、福岡からお見えになる。そのときもお二人来られていた。はじめ私の席からは後ろ姿しか見えなかった。

司会が「久保田先生です」と紹介した。

一人の先生が立ち上がり振り返られた。髪こそ白くなられていたが、たしかにあのときの久保田先生だった。ダンディなお姿は昔と変わらず

若々しい。

歓談が始まると私はすぐに久保田先生の席へ行った。

「先生、三島由紀夫が自決した日、私たちのクラスでそれを知らせてくださったのを覚えていらっしゃいますか」

先生は一瞬考えて答えられた。

「うーん、そんなこともあったね。君の名前は思い出せないけど、顔は見覚えがあるよ」

昔と変わらない温厚な語り口が懐かしかった。と同時に思いがけない先生の言葉に胸が熱くなった。三十年以上も前、一学年五百名もいた当時の担任の生徒でもない私のことなど、覚えておられるはずがないと思っていたからだ。

先生はそのあとも次々に元教え子たちに囲まれて楽しい歓談されていた。先生の周りには幸せな懐古という雰囲気の流れているようだった。

そして私はショックに三島事件は、三十六年の年月を経て、時代を懐古するための時の葉のようになっていたのだと感じていた。

～ 平成 19 年度事業計画 ～

行 事	開催日	対 象
合 同 幹 事 会	4 月 6 日	常任幹事・学年幹事・当番幹事
あさぼらけ発行	4 月末日	
第 24 回 総 会	5 月 19 日	会員全員
当番幹事引継ぎ会	6 月末	常任幹事・新旧当番幹事
ビールパーティー	8 月末	有 志
合 同 幹 事 会	11 月下旬	常任幹事・学年幹事・当番幹事
新 年 会	1 月下旬	有 志

▲ 第23回総会の久保田先生（右から3人目）

年会費納入のお願い

わが同窓会も発足二十四年を迎えました。会員の数も増加し、総会、新年会に若い会員の参加も次第に増え、同好会活動も活発になってまいりました。

しかしながら、同窓会活動の基本になる年会費の納入状況はいまひとつです。

一人でも多くの方のご協力をお願いします。

年会費	二千元
六年一括	一万円
十年一括	一万五千元

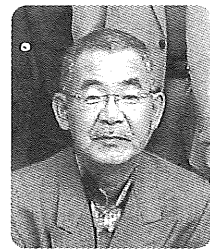
平成 18 年度決算

科 目	18年度決算	19年度予算
1. 収入の部		
1) 年会費	425,000	500,000
2) 総会費	804,000	1,000,000
3) その他	3,022	0
当期収入計	1,232,022	1,500,000
名簿作成積立金	300,000	400,000
前期繰越金	871,742	855,474
総 合 計	2,403,764	2,755,474

科 目		
2. 支出の部		
1) 運営費	305,636	390,000
2) 総会費	842,654	1,000,000
3) 名簿作成積立金	100,000	100,000
4) 名簿作成・発送費	0	0
5) 予備費	0	10,000
当期支出計	1,248,290	1,500,000
名簿作成積立金(前年度迄分)	300,000	400,000
次期繰越金	855,474	855,474
総 合 計	2,403,764	2,755,474

《私の思い出》

豊かな国アメリカ滞在記 (1)



糸嶺 直樹 (高12回)

大幅な財政、経常赤字を抱えるアメリカだが不思議と世界の資本が集りつづける国、U.S.A.。その、豊かな国に三度、足掛け十五年駐在。苦しかった事、楽しかった事を振り返り、思い出を綴る。

《その一 西部》

一回目は一九七〇年から一九七五年。Los Angeles郊外Long Beachの北に位置するGardena市に住む。名前のとおり日系移民の庭師が大勢住んでいた。Pacific Oceanの海流の関係で夏涼しく、冬も温暖なParadise。当時はsmogも無く、はるか東のBig Bear Mountainも見渡すことが出来た。

当時、給与は\$650/月。1\$=¥360固定で邦貨換算、234,000円。日本での給与は40,000円弱。平屋3DK一戸建て家賃は\$100/月と安く、輸入食料は高かったが、California米等localの食材は日本よりも安くエンゲル係数は低かった。Gasolineは

て暴動を起こす貧しい黒人、Mexican、および勤勉な日系移民で構成されていた。

現在はKorean, Taiwanese, Vietnamese, Philippine, Indian, Hispanic他あらゆる国の貧しい人、一方、有能な頭脳が流入している。治安・秩序の悪化は大きな課題だが、発展途上国の多くの人々の移民および職を認める鷹揚なアメリカに大いに賛同する。少子化が進む日本こそ前向きに学ぶべき。

さて、次は懐かしいdrive旅行。65 cent/gallon (3.8 liter)。Motelは家族で\$10/\$30/1泊。Christmas Holidays, Thanks Giving Day, Independence Dayの連休を狙って車での遠出。日頃、家にもり勝ちの駐在員のwivesには手ごろで不可欠なノイローゼ解消策。二泊三日のdriveは、真、青な海と空のPacific coastを曲がりくねってSan Franciscoの写定番のGolden Bridgeの写

真撮影とFisherman's wharfにcrabを満喫。氷河で削られたHalf DomeのYosemite国立公園やGamble-Villumination of Las Vegasくもりの泊のdrive圏内。泊では想像を絶する地球の割れ目Ground Canyon、John Wayneの駅馬車で馴染みのMonument Valley。

最後の年は9日を掛けて、Salt Lake・Mt. Teton→Idaho→Wyoming・Yellow Stone

駐在二年目には為替が変動性に。いきなりドルは\$11360↓¥240。その年に生まれた長男の名前は円路。円の路(みち)やいづくに?と台致の一九七一年。円が強くなることは喜ばしいが、輸出企業にとっては厳しい動向。更に、ドルは\$11360↓¥240↓¥180に移行し、結局、多くの日本の自動車関連企業は中西部を中心に生産拠点を展開する事。

編集後記

軽い気持ちで引き受け、第八号の発行を、総会までにと書いたものの、さて、原稿はお願いした期日までに集まるのか、その後の編集はどうなるのだろうか? 等等、昨年までの、故占部さんのご苦勞を体験した。何とか間に合ったのも執筆者および(株)川口誠文社の協力のおかげです。

感謝 (S)

■ 計 報 ■

占部 信廣さん逝去



最後となった、第23回総会にて

平成十八年十月三十一日、高校十七回卒の占部信廣さんが入院先で御逝去さ

れました。病気を抱えながらも、関西福中福高同窓会の活動にいつも明るい笑顔でご尽力されていた占部さんの早すぎる死に、悲しい気持ちで一杯です。心から占部さんのご冥福をお祈り申し上げます。

